IATDMCT&SFPT2026 に参加して

薬学研究科　薬学専攻
博士課程　4 年次生
浦嶋　和也

1. はじめに

この度、国際交流基金の助成を受け、2026 年 9 月 28 日から 30 日の 3 日間にわたりフランスのレンヌで開催された International Association of Therapeutic Drug Monitoring and Clinical Toxicology and the French Society of Pharmacology and Therapeutics (IATDMCT＆SFPT) 2026 に参加しました。本学会では、「Changes in renal function after initiation of ARNI : A multicenter retrospective study of concomitant diuretics, NSAIDs, and PPIs」という演題でポスター発表を行いました。



写真 1　会場入り口にて

2. 学会について

IATDMCT は薬物治療モニタリングと臨床毒性学に関連する国際学会です。今年度はフランスの薬理学会である SFPT との合同開催となり、参加登録人数は 861 名で、世界各国から多くの医療従事者や研究者が参加しました。会場はレンヌの「Couvent des Jacobins（ジャコバン修道院）」で開催されました。外観からは学会会場とは思えない雰囲気でしたが、内部はしっかりとコンベンションセンターとしての設備や機能が整備されており、世界にはこのような施設が学会会場として活用されていることが印象的でした。



写真 2　学会会場外観



写真 3　学会会場内風景

3. 学会の様子

学会 1 日目は早朝からセッションが開始されており、最初に IATDMCT Awards のセッションに参加しました。このセッションは Opening Ceremony を兼ねて開催されており、日本人も受賞されていました。次に、個人的に興味のあったタクロリムスなどの移植領域で使用される免疫抑制剤の Oral Presentation を聴講し、世界各国の免疫抑制剤の実臨床での取り組みを学ぶことができました。昼食時間帯はポスター会場と企業ブースで軽食が提供され、参加者は昼食を取りながら自由にポスター発表者と議論できる形式が採用されていました。このようなカジュアルな雰囲気の中で活発な意見交換が行われるスタイルは、日本の学会ではあまり見られず、非常に印象的でした。この形式は 1 日に 2 回設けられていた「Coffee Break」の時間帯にも同様に行われました。そのため、ポスター発表者は学会の期間内に 3 回セッションを行うこととなり、参加者との交流や議論の機会が十分に確保されていました。



写真 4　ポスター会場



写真 5　軽食および企業ブース

午後からは自身の大学院での研究に関係のある pharmacoepidemiology（薬剤疫学）や pharmacovigilance（医薬品安全性監視）についてのセッションを聴講しました。しかし、講演内容を十分に理解するためにはヒアリング能力が不可欠であり、自身の語学力不足を痛感しました。スライドに示された内容からは理解できる部分も多かったものの、口頭で説明される詳細な内容を十分に聞き取ることができない場面もありました。特に印象に残っているのはフランスの医薬品副作用データベースの解析に関する研究です。自分自身の研究テーマの一つとして日本の医薬品副作用データベースの解析研究を行っているため、日本とのデータ収集方法の違いや設定などについて新たな知見を得ることができました。19 時 15 分からは会場である修道院の一角を利用して「Welcome Reception」が開催され、軽食やドリンクが提供されました。参加者同士が自由に交流できる場となっており、国際学会ならではの雰囲気を楽しむことができました。

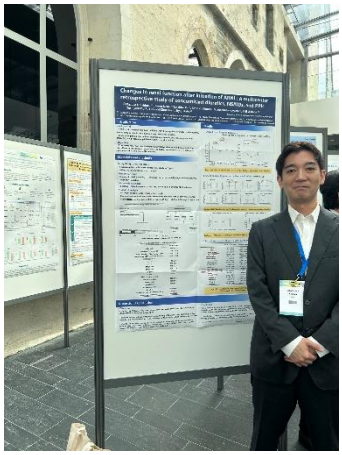


写真 6　ポスター発表

学会 2 日目は先述した形式でポスター発表を行いました。ポスターセッションは、ランチタイムと午後の Coffee Break と翌日午前の Coffee Break の計 3 回実施され、多くの参加者と議論する機会を得ることができました。海外参加者の方からの質問に関しては、事前に想定していた内容も多く、英語で概ね内容を伝えることができたと感じています。一方で、質問の細かな意図を聞き取ることができないこともあり、ここでもヒアリング能力が重要であることを認識しました。また、自身の英語での説明に対しても「Pardon?」と聞き返されることもあり、発音や語彙力についても更なる向上が必要であることを実感しました。

2 日目から 3 日目にかけても抗菌薬や抗炎症薬関連のシンポジウムなどを聴講するとともに、ポスターセッションを行いました。いずれのセッションでも活発な議論が交わされており、最新の研究動向や各国の取組について学ぶ貴重な機会となりました。

最後に Closing Ceremony にも参加し、現大会長から次期大会長へ引継ぎが行われ、学会は終了となりました。

4. Gala Dinner について



写真 7　テーブルの様子



写真 8　コース肉料理の写真

学会 2 日目の夜には、Gala Dinner（懇親会）が開催され、多くの日本人発表者の先生方とともに参加しました。さすがフランスらしく、会場にはきちんとテーブルが設けられ、各テーブルにフランス料理やシャンパン、ワインが用意されていました。特に印象的だったのは料理で、肉料理や魚料理、デザートまでを含む本格的なコース料理での提供がされたことに驚きました。開始は 20 時でしたが、実際に料理が提供されたのは 21 時ごろでした。空腹であったことと本場のフランス料理だったということもあり、どの料理も格別のおいしさに感じられました。さらに、これは IATDMCT 恒例行事とのことですが、途中からダンスタイムが始まり、DJ にあわせて参加者全員がまるでディスコのように会場で踊るというイベントが行われました。結局ダンスタイムは深夜 0 時ごろまで続き、ホテルには深夜に戻ることになりましたが、国籍や職種を超えて参加者同士が交流できる大変楽しいひとときを過ごすことができました。

5. フランスについて

フランス到着後、学会会場のあるレンヌ市街を散策しました。フランスはスリや盗難などあまり治安がよくないことでも知られていますが、レンヌは比較的治安がよい都市とされています。休日には多くの人で街が賑わっていました。また、レンヌを象徴するサン・ピエール大聖堂が無料開放されており、訪問しました。崩壊したゴシック建築を何世紀にも渡り改修し、現在の姿は 1844 年に完成したそうです。堂内には金箔装飾が施され、大理石風の柱が壮麗な空間を演出していました。また、レンヌからバスで世界遺産であるモン・サン・ミッシェルにも訪問しました。サン・マロ湾に浮かぶ孤島であり、島の中央に修道院が建っており、幻想的な姿はフランス屈指の観光名所として人気があります。修道院までの参道には多くの店が並び、現地の雰囲気を楽しみながら買い物をすることもできました。



写真 9　レンヌ市街風景

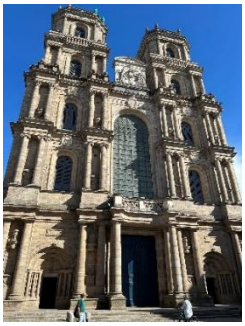


写真 10　大聖堂外観



写真 11　モン・サン・ミッシェル

6. 最後に

今回、国際交流基金の助成を受け、フランスで開催された IATDMCT＆SFPT2026 においてポスター発表を行う機会をいただきました。心より御礼申し上げます。普段参加している日本の学会とは全く異なる雰囲気を体験できるとともに、世界各国の研究者や医療従事者による最新の研究成果に触れることができました。また、自身の研究を英語で発表し、海外の参加者と議論する中で、研究内容を国際的に発信するためには英語によるコミュニケーション能力をさらに向上させる必要があることを強く実感しました。また、日本から発表・参加されている先生方も多く、海外においてそのような先生方と交流できたことも貴重な経験となりました。この経験を活かし、日本のみならず海外にも研究を発信できるような薬剤師を目指していきたいと思います。



写真 12　日本人の先生方との懇親会

最後になりましたが、今回の発表に際し助成くださった大阪医科薬科大学国際交流基金の関係者の皆様、薬部治療学I研究室の皆様、職場および関係各所の皆様に厚く感謝申し上げます。